

冬の道北の旅 2022



2022年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

冬の北海道、それも稚内などの道北地域の温泉を巡るといふかなり個性的なパッケージツアーに妻と参加した。そしてこのツアーは私たちが思っていた以上に充実した旅になった。

第一章 稚内

■日本最北の空港

3月の初め、羽田空港から2時間足らずで私たちは日本最北の空港、稚内空港に降り立った。既に正午を少し回っており、気温1℃、晴れ、微風、そんなに寒いという感じはしない。

稚内空港の小ぢんまりした到着ロビーには私たち17人のツアー客以外はあまり残っていない。50人くらい乗っていた乗客の多くは地元の人々かビジネス客らしく、早々に空港を後にして散っていったからだろう。

ロビーの端には羽田空港で受付をしてくれた添乗員が立っており、その周辺に今回参加のツアー客が集まっている。添乗員は背の高い男性で、歳の頃なら50才くらいだろうか。温泉観光アドバイザーの資格を持っていると案内に書いてあった。温泉観光アドバイザーとは各地の温泉の効能や泉質、歴史などの知識が求められる資格で認定試験もある。

彼の隣にはバスガイドらしい女性が旗を持って立っている。年齢は添乗員と同じくらいか、もちろん地元の人だろう。

バスに案内されると、1人が2席を占有する座席配置になっている。コロナ禍ということもあるが、このツアーがクリスタルハートというブランドということもあってのことだろう。



【道北の地図】

■クリスタルハート

そのクリスタルハートのパッケージツアーを私は今回初めて利用する。阪急交通社の旅行ブランドで有名なのはトラピックスで、安価で利用しやすい価格設定なので人気があるが、クリスタルハートはそれよりもワンランク上の旅行をターゲットにしている。昨今のコロナの影響で海外旅行に行けない旅行者が国内旅行に流れ込み、金銭的に比較的余裕のある旅行好きが上質で一味違う旅を求めてクリスタルハートを利用するようになって最近は結構流行っている。

このクリスタルハートのブランドが登場して 20 年という節目の年を記念して、2 人で 20 万円というツアーをいくつか売り出しており、その中のひとつが今回の道北の温泉めぐりだ。

このツアーの正式名称は「豊富温泉（1 泊目）と当社基準Aランクホテル（1・3 泊目）に 2 泊する 個人では行きづらい 7 つの温泉めぐり 4 日間」という。確かに個人で行こうとするとこの内容で 1 人 10 万円は難しいだろうと判断し、今回私も申し込んだ。

■意表を突かれた昼食

空港を出て、バスは昼食をとるために稚内市内の「副港市場」の駐車場に停まった。

副港市場の入口はいかにも新鮮な海産物がそろっているぞ、という面構えをしている。中に入ると毛ガニを中心にした魚貝類や水産加工品が並んでおり、その売り場をぬけてレストランに案内された。当然私は毛ガニ、イクラ、ホタテなどがテーブルに並んでいると想像していたが、私の予想は大きく外れた。

毛ガニどころか魚貝類は何もなく、宗谷牛のサーロインステーキが出てきた。ステーキとは言っているが 5cm 角に切った肉を卓上の固形燃料のコンロで焼くというスタイルなので焼き肉という感じがする。

宗谷牛、私にとっては初めて聞くブランドだ。ちょっと太った店の支配人らしき人はこの牛のことを褒めちぎっている。



【副港市場】



【宗谷牛のステーキ】

早速インターネットで調べてみる。

「宗谷黒牛（そうやくろうし）は日本最北端に位置する宗谷岬牧場で生産される肉牛。安全・安心にこだわり、飼料は宗谷岬牧場などで収穫した自家産牧草を中心に与え、仔牛から一貫生産により育てている。しっかりとした濃厚な赤身と淡白な脂肪とのハーモニーが絶妙」と書かれている。かなり自信を持って育てていることがその文面から理解できる。

食してみると、まず柔らかい。といっても良く言われる“とろける”程ではなく、それなりの食感がある。

味付けはステーキのタレ、ワサビ醤油、塩で食べるようにと3種類用意されている。私は全てを試してみたが、何で食べても素材が良いためだろうか、実に美味い。

魚貝類は食べることはできなかったが、十分に満足できる昼食になった。これはこれからの食事が期待できそうだという気持ちになってバスは副港市場を後にした。

■ノシャップ岬

稚内には宗谷岬とノシャップ岬と2つの岬がある。バスガイドの分かり易い説明をそのまま使わせてもらおうと、この2つの岬はカタツムリの角のように見えて右側つまり東側の角が少し長い。この長い方の角の先が日本最北端の宗谷岬で、やや短い西側の角がノシャップ岬になる。

私たちはそのノシャップ岬にやって来た。この岬は市街地の外れにあって、平坦な集落を抜けた少し先の所にある。従って低地にあるので遠くから見やすいように高い灯台が建っている。その高さは42.7m、日本で2番目の高さを誇ると、バスガイドがやや自慢げに説明してくれる。ちなみに日本で1番は43.65mの出雲の日御碕灯台だと付け加えて、その差がほんのわずかだと彼女は言いたいようだ。

岬にはイルカのオブジェがあって、バスガイドは「城みちるは乗っていませんよ」などと言っている。受けを狙ったらしいが、歳が分かってしまうだろう。

岬からは利尻島、礼文島、そして遥か彼方に樺太(サハリン)も見える。岬の先端から陸地側を見ると小高い山があってドームのようなものが建っている。ここは自衛隊のレーダーサイトで陸海空の各自衛隊の施設があるとバスガイドが教えてくれる。



【イルカのオブジェと灯台】

彼女の説明では1983年に発生した大韓航空機撃墜事件の様子をここのレーダーで捉えていて、軍事機密であるレーダーの性能が分かってしまうのに撃墜の詳細を公表したことで有名になった。

そして撃墜したソビエト連邦は崩壊し、現在は同じ連邦国家の仲間だったロシアがウクライナに侵攻している。非情という意味ではロシアという国は何も変わっていない。

私の記憶が確かならば、この撃墜事件の5年前にも、やはり大韓航空機がソビエト連邦領空を侵犯し戦闘機に撃たれシベリアに強制着陸させられた事件があった。この時も2人が死亡しているが、この飛行機に私の友人が乗っていた。春休みを利用してヨーロッパ旅行に行った帰りに拉致されたので春休みが明けても大学に顔を出さないで、どうしたのかと心配していたが、そんな事件に巻き込まれていた。それでも何とか無事に帰って来たので、仲間内で「生きて帰って残念会」を開いた。彼の話では2人死亡したそのうちの1人は彼の斜め前のその前の席に座っていた人で、戦闘機の機銃掃射で亡くなったと言っていた。

その事件が引き金になったのか、彼は防衛庁(現防衛省)に就職した。

■ 稚内駅

日本の鉄道最北端の駅、稚内駅にバスが立ち寄る。

「ひょっとしたら今回が見納めかもしれませんよ」とバスガイドが言っている。新しく建て替えたようで綺麗な立派な駅舎なのに、見納めとはどういうことなのか。

それは駅に貼ってある時刻表を見て理解した。到着列車が1日6本しかない。それらの列車に多くの乗客が乗っているとは思えないので、どう考えても赤字路線だろう。経営状況が思わしくない JR 北海道にあって、この路線を維持して行くのは相当に苦しいはずで、廃線は時代の流れかもしれない。

それにしてもこの時刻表は不思議だ。到着列車は6本なのに発車列車は7本ある。毎日乗客の乗っていない列車を運んできているということか。

稚内駅は最北の駅で、宗谷本線の終着駅だ。しかし駅舎からさらに外に線路が北に向かって延びている。もちろん今は使用していないので正確には線路の跡がある。

その線路が繋がっていた先には稚内栈橋駅という施設があった。

その稚内栈橋駅のあった場所は稚内駅から500mくらい先で、バスに乗ってその駅のあった場所に行ってみると、大きな半アーチ状の長い建造物が建っている。船を待つ乗降客が風雪の中で大変だったのでこの半アーチ状の待合所ができたという。コンクリート製で頑丈な建造物なので今も朽ちることもなく完全に残っており、「北防波堤ドーム」と呼ばれる観光名所になっている。高さや幅が10mくらいで全長は500mもあるだろうか、実に立派だ。それほど風雪が凄まじかったのだろう。

幸運にも本日は天候も良く、風も雪もないので、この待合所の有難味は感じない。



【北防波堤ドーム 中央から片側を撮っている】

近くには相撲の大横綱の大鵬が上陸したという碑がある。碑文には大鵬は樺太で生まれて第二次世界大戦末期に樺太が混乱する中、幼い大鵬は母親と引き揚げ船に乗って小樽を目指したという。ところが母親の船酔いがひどく稚内で途中下船した。しかしその船は小樽に着く前に潜水艦の攻撃で沈没したと書かれている。人生とは何が幸いするか分からないものだ。

■樺太に想う

樺太は、昔は日本だった。終戦直前の最盛期には日本人が 40 万人も住んでいた。稚内から船が出て樺太の大泊に着いて、そこから鉄道網が構築されていたので樺太の南半分には日本の街が多くあった。樺太は南北縦に長く、その面積は北海道とほぼ同じで大きい。そしてその歴史はロシアと日本の関係を物語っている。



【樺太最大かつ美しい都市だった豊原市の様子 稚内市樺太記念館の写真より】

江戸後期の 1808 年に間宮林蔵が探検し樺太が島だということを発見して日本領と宣言した。当時は現地人が少し住んでいたらしい。

江戸末期 1855 年に日露和親条約が締結された。しかし樺太の帰属は明確にならず国境は決定できなかった。ただそれまで樺太にロシア人はいなかったが、以降北部にロシア人が入植した。

明治になって 1875 年に樺太・千島交換条約により樺太はロシア領となる。その代わりに千島列島が日本領になった。島は増えたとはいえ、広大な樺太を手放した。

1905 年日露戦争末期、日本軍が樺太に侵攻し全域を制圧した。日露戦争勝利後のポーツマス条約により、北緯 50 度以南の樺太の半分が日本のものになった。

そして第二次世界大戦末期の 1945 年 8 月 9 日ソビエト連邦が日ソ中立条約を一方向的に破棄して樺太南部に侵攻してきた。以降樺太はソビエト連邦、そして今はロシアが支配している。

1952 年のサンフランシスコ講和条約で日本は樺太と千島列島を放棄した。ただし当時のソビエト連邦はこの条約を批准していない。

千島列島を放棄したのに今でも北方領土問題は残っている。それは国後、択捉、歯舞、色丹の 4 島が千島列島に入るか入らないかがポイントで、地図を見るとその 4 島は微妙な位置にあるが、樺太と千島を交換する以前から、それらの 4 島は日本領で多くの日本人が住んでいたからだ。

もしも、第二次世界大戦に日本が参戦しなかったならば、樺太の南半分、北方四島はもちろん、カムチャッカ半島の手前までの千島列島も日本の領土だった。さらに台湾、朝鮮半島、満州も日本の影響下の国や地域だった。

おっと、歴史に“もしも”は禁物か。それに参戦と敗戦が無ければ日本は今のような自由な民主主義国家になっていなかったかもしれない。

■ 稚内グランドホテル

初日の宿「稚内グランドホテル」にチェックインする。

温泉観光アドバイザーの添乗員がバスの中でこのホテルの温泉について、こう説明していた。

「日本最北の稚内温泉は、このホテルより少し北にあってノシャップ岬を回った西海岸にあるのが本家本元の稚内温泉です。このホテルも稚内温泉を名乗っていますが、微妙に泉質が違います。いずれにせよ道北の温泉はどの温泉も、しょっぱい、黒っぽいのが特徴です」。

その稚内温泉を名乗るこのホテルの大浴場に入る。薄い緑がかかった黄色で炭のような匂いがして、実に温まる温泉というのが温泉ソムリエの私の感想だ。

露天風呂はないが、サウナがある。サウナ大好きな私は早速入るが、水風呂がめちゃくちゃ冷たい。外気温は氷点下だろうから水風呂もそれに近い温度のはずだ。通常のサウナの水風呂は15℃くらいなので、これはとんでもなく冷たい。私のサウナ歴で一番の冷たさだろう。

夕食はとても豪華だ。ミズダコのしゃぶしゃぶを中心にして海の幸が並んでいる。ミズダコは寒い地方に生息するので、もちろん北海道の漁獲量が最も多く、それも北に行くほど多く獲れるようだ。それでここ稚内でミズダコなのだろう。

私はミズダコのしゃぶしゃぶというものを食した記憶がない。おそらく初体験だろう。実にありがたい初経験をさせてもらった。

毛ガニも出ているので、私はホテルのスタッフに「毛ガニの旬は夏では？」と聞くと、スタッフは「毛ガニの旬は道北では冬、暖かくなるにつれ南下し、夏には道南が旬になります」と教えてくれた。私は札幌、もしくはそれよりも南で毛ガニを食べていたので夏が旬だとばかり思っていたが、これもいい勉強になった。



【稚内グランドホテルの夕食 右にミズダコにしゃぶしゃぶ 中央に毛ガニ】

朝食で、「稚内牛乳」と「北海道とよみしぼり」という 2 つの牛乳が用意されている。どちらも美味しいが、北海道とよみしぼりの方がより美味しく感じる。少し甘口で爽やかな味になっている。

第二章 オホーツク海

■オホーツク海

2 日目は、北海道とよみしぼりの産地の豊富町を目指す、その前にオホーツク海側に出る。といっても日本海とオホーツク海の間に境目がある訳でなく、どこからオホーツク海なのかはよく分からない。私はてっきり宗谷岬がその境界かと思っていた。ところがバスガイドは、ノシャップ岬から宗谷岬に向かう途中で沖合を指さした。そこには海上に浮かぶブイのような海上灯台があって、そこがその境目だと教えてくれた。

稚内にあるもうひとつの岬、宗谷岬にやって来た。海上灯台の東にある岬なのでオホーツク海に囲まれた岬ということになる。岬には日本最北端の碑があり、お決まりのように記念写真を撮る。私にとってこの日本最北端の碑は 3 回目の訪問になる。



【海上灯台】



【日本最北端の碑】

そして日本最北端の碑の手前には間宮林蔵の銅像が建っている。間宮林蔵は江戸時代に樺太に渡って樺太が島だということを発見した探検家だ。

この銅像は学生時代に私が訪れた時にはなかった。彼の生誕 200 年にあたる 1980 年に青少年に世界へ羽ばたく夢と勇気を与えたいとの願いから建立されたという。

それにしてもその時代の樺太探検は想像を絶することだったに違いない。樺太は北海道とほぼ同じ面積でとても広く、その外周を全て歩かないと島と確認できない。寝袋もテントもないので毎日野宿だったのか。少しだけ人が住んでいたらしいが言葉は通じないだろう。食料はどうしたのか。熊も出ただろう。考えても切りがないほど厳しそうな旅だ。

■浜頓別の思い出

宗谷岬から網走に向かってオホーツク海沿いを南下するとクッチャロ湖がある。この湖は白鳥の飛来で有名で、私たちが訪れた時には多くの白鳥が出迎えてくれた。

周囲 27km もある日本最北の湖で愛鳥家からは“白鳥の湖”と言われている。これらの白鳥の多くはシベリアから樺太を経由してクッチャロ湖に飛来し、その後は北海道から本州に渡り越冬するというから、間宮林蔵も驚く旅をしている。



【クッチャロ湖 白鳥】

クッチャロ湖は浜頓別町にあり、かつて大学生だった私が泊まった思い出ある町だ。その頃、北海道には若者たちが大勢訪れ、ユースホテルはじめとして男女別相部屋の個性的な民宿も多くあった。私が泊まったのは「トシカの宿」という民宿で、若い夫婦が小さな子供を育てながら営んでいた。

思い出すのはトシカの宿に泊まった朝のことだ。泊まっている若い女性たちは化粧に時間をかけているのでなかなか食堂に来ないので宿主が呼びに行き、「無駄な抵抗はやめよ」と連呼して女性部屋のドアをロックしていた。年頃の女性の長い化粧を揶揄しての言葉だったが、私にとっては実に新鮮でウィットに富んだ名言として脳裏に焼き付いた。

夏と冬に1回ずつ宿泊して、数年経った頃に私の元に一枚のハガキが届いた。内容は宿友を募集するというもので、寄付を募って応じてくれた人は安く泊まれるというものだった。民宿経営が悪化しての策だったのだろう。

そんなこともあってのトシカの宿は既に存在していないのだろうと思いながらもインターネットで検索すると、何と今も存在して営業している。1985年にある女性旅行者がオーナーを引き継いだという。思い出ある宿を人手に渡したくなくて2代目になり、男女別相部屋で1泊2食付き5500円、ジンギスカン鍋を宿泊者全員でつくという営業スタイルを続けている。

機会を見て、また訪れたいものだ。

■浜頓別温泉

浜頓別町の「はまとんべつ温泉ウイング」で立ち寄り湯をする。今回のツアーで巡る7つの温泉は6つまでが日本海側の温泉だが、浜頓別温泉だけはオホーツク海側にある。塩化物泉で少し濁っているという泉質は他の6つの温泉に似ているが、何かこの温泉は違うように感じられる。

サウナの中で地元の人と話すと、今日の湯は少し薄くて温度も低いと言っている。ということはこの温泉は沸かしていないことを意味している。

脱衣場に戻って温泉成分表を見ると、湧出温度は44℃ということで実にいい温度で湧き出ている。44℃ならば源泉をそのまま使っているのだろう。そのためか鮮度がいいように感じられる。

私は温泉ソムリエという資格を持っているが、その資格を取るための講習会で温泉の鮮度について講義を受けた。

その時の内容は、金属が酸化して錆びるように人間の皮膚も酸化し老化する。一方で酸化とは逆の還元は老化を抑制し若返り効果がある。その還元効果が期待できる液体が温泉で、それは地中深く生成されるために酸素が不足した還元状態で生成されるからで、しかし地上に出て大気に触れると徐々に酸化が始まる。つまり鮮度が落ちる。この酸化還元のレベルが温泉の鮮度を意味し、ORP（酸化・還元電位）の測定でわかるという。それはいわゆる酸性・アルカリ性のpHではなく、森林などでマイナスイオンによってリフレッシュような感覚に似ている。

ではその鮮度がおちる要因は、大気に触れる時間や加熱循環処理などである。逆に鮮度を保つには入浴温度に近い掛け流しの湯で源泉から近いことなどになる。

この要件に浜頓別温泉は合致しているようで、それゆえ入浴後は若返ったような気分になった。

■猿払村は帆立貝の村

クッチャロ湖のやや北に位置するオホーツク海沿岸の猿払村はホタテ貝の産地で全国一位だという。そのためにこの小さな村はホタテ貝で財を成した人々が多く、ホタテ御殿と呼ばれる家がたくさんあるとバスガイドが教えてくれる。確かに立派な家が、こんな最果ての地にしては多く建っている。

その猿払村の「ホテルさるふつ」のレストランで昼食になる。メニューはホタテの刺身、焼きホタテ、ホタテのフライ、ホタテのバター焼きなどとホタテのオンパレードになっている。

ここに来る途中のバスの中でホタテのバター焼きが卓上の固形燃料コンロで出てきたらご飯を少し入れてリゾットにすると美味しいとバスガイドが指南してくれていた。案の定、固形燃料のコンロの上には大きなホタテの貝殻が置かれており、その上にはホタテの貝柱がバターと共に乗っている。

乗客のほぼ全員が指南どおりにリゾットにして食べている。もちろん私たち夫婦も右へならいだ。そしてその味は、言うまでもなく美味しい。



【バスガイド指南のホタテのリゾット】

第三章 豊富温泉

■豊富温泉を目指す

猿払で帆立料理を満喫してバスは日本海側にある豊富温泉を目指して山道に入る。山と言っても平坦は丘のような丘陵地で標高も 100m くらいしかない。ほとんどが白い大地、いや台地と書いた方が表現としては合っているように感じる。

猿払を出て民家がなくなって、しばらくして忘れたところにまた民家が現れる、そしてまたしばらく山だけになって、再び忘れたところに民家が現れる。こんなところでどうやって生活しているのかと、あれこれ考えながらバスに揺られて 1 時間程で豊富町の看板が目に入ってくる。

ツアーの名称にも入っている豊富温泉とは、この道北地域を代表する温泉で、大正時代に石油の試掘で温泉が湧いたということで北海道にしては比較的古い温泉だという。バスガイドもそして添乗員もこの温泉の源泉は石油成分が強く、非常に面白いと言っている。そしてこのような温泉は他では絶対に体験できない、さらに下着やタオルに強烈な臭いが付くから注意した方が良くとも言っている。

その温泉を満喫できるようにと今宵泊まる豊富温泉の宿に着いたのはまだ十分に明るい時間で、2 時半を少し回った時刻だ。

■豊富町ふれあいセンター

私と妻は、まだ早いといっても北海道は日没が早いので、暗くなり寒くなる前に近くにある「豊富町温泉ふれあいセンター」に立ち寄り湯に出かけた。



【豊富町温泉ふれあいセンター 背後にはスキー場】

ふれあいセンターには湯治の湯と一般の湯と2つの湯がある。それらは廊下で繋がってはいるものの裸での行き来は出来ず一度着替えないといけない。私は少しぬるいという湯治の湯を先に入ることにした。男女別なので妻は一般の湯に先に入ると言って、廊下で別れた。

脱衣場に入ると強烈な石油の臭いがする。鼻にツンとくる臭いで、私は、いや私の体はその臭いに相当驚いている。それは動物の本能的な反応なのかもしれない。多くの温泉に入っている私にとっても石油臭いのは初めてだ。石油の試掘で出てきたという温泉の由来が納得できる臭いだ。

浴室に入るとさらに臭いがきつくなる。

浴槽は2つあって、片方はぬるい湯で湧出温度は34℃ということで、おそらく源泉そのものだろう。もう片方の浴槽の方はもう少し温かい。おそらく39℃くらい、それでも長く浸かっていると体が暖まらない。

私は温かい湯の方に浸かる。周りを見渡すと何人かの先客がいて、瞑想している人も、本を読んでいる人もいる。その中で驚くことにドロドロの重油のようなものを肌に塗りつけている人がいる。このドロドロが石油臭さの元になっていて、そしてこれが湯治の湯と呼ばれている由縁なのだろうと私は理解した。さらに目についたのは湯船の端にはソーセージを繋いだロープのようなものも置かれている。これは海でタンカーが事故を起こした時にオイルの広がりを止めるために使われるオイルフェンスのように使うらしい。そう推測したのは廊下にポスターが貼ってあって、オイルフェンスのように使われていたことを思い出したからだ。それにしても湯船にこんなものまで用意されているとは驚愕の一語に尽きる。

しばらく油臭い湯に浸かっているうちにその臭いにも慣れてきた。ところが体を触ってみると浴槽に直接触れている尻やモモといった部分がヌルヌルとしている。手で触ると水を弾くから油分が浴槽に溜まっているのだろう、何ということか。



【豊富温泉のポスター】

湯治の湯を出て、今度は一般の湯に入る。こちらはほとんど石油の臭いもせず、温度も適温になっている。油成分を除去して加温しているのだろう。だから“一般に受け入れ易い湯”で一般の湯なのだろう。それにしてもこの湯は実に温まるから、その成分によるところが大きいのだろう。

風呂上にロビーに貼ってあるポスターを見ていてまた驚く。この温泉は医療効果が高いので医療費控除の対象になっていると書かれている。もちろん医師がこの温泉での療養を勧めた場合に限るとのことだが、それだけの効能もあるから確定申告する人も多いのだろう。

とにかく私の知識、経験ではこんな温泉は初めてで聞いたこともない。恐るべき豊富温泉だ。

ふれあいセンターを出て私が写真を撮っていると、同じツアーに参加している夫婦が出てきた。私が「いい湯でしたね」というと、奥さんが「そうですね」と答えた。

私は「凄かったですよね、湯治の湯の石油の臭いもヌルヌルもとんでもない。オイルフェンスまであるのだから・・・」と付け足した。

夫婦は顔を見合わせながら驚いている。そして私に向かって「受付では温度が違うだけだと聞いたので湯治の湯には入らなかったのですが、そんなに違うのですか？」と聞いてきた。

私は「全く違いますよ。絶対に入った方が良いですよ。ここまで来てあの湯を体験しない手はないでしょう」と付け加えた。

夫婦は慌ててふれあいセンターに戻って行った。

翌朝、再びその夫婦に会うと開口一番「昨日はありがとうございます。お陰様で貴重な体験を逃すことになる所でした」と礼を言われた。

■ホテル豊富

今宵は豊富温泉ならこの宿だろうという「ホテル豊富」に泊まる。ホテルの受付に聞いたら「当館の温泉は油成分を除去しており、臭いはないですが泉質はいいですよ」と言っていた。

その大浴場に入ると、泉質はふれあいセンターの一般の湯に似ており、受付の言葉通りとても良い泉質で体が温まる。泉質以外にも温泉棟の建物の造りがなかなか面白い。円柱形で上から見ると丸い形をしており、真ん中にはサウナがあってそれ取り囲むように男女別の脱衣場と洗い場、洗い場の外側に外を向いて水風呂、沸かし湯、温泉の各浴槽がある。

私は温泉の浴槽に浸かってそこから景色を眺めるが、それがなかなか素晴らしい。雪が積もっている白い平原とその向うに林が広がる。いかにも北海道という感じがする。



【ホテル豊富の大浴場】

夕食はホテルの特設会場に用意されている。

テーブルに着くと見かけない魚の開きがある。あるツアー客はホッケの開きだと言っており、私も最初はホッケかと思ったが、どうもホッケではないらしい。頭の部分が付いているのでひっくり返すとグロテスクな顔つきが現れた。

私は驚いて、一瞬言葉を失った。そして「これは、ハッカク（八角）だ！」と思わず声を上げてしまった。何故驚いたかという、ハッカクは滅多に食べられない高級魚だからだ。

私はかつて友人たちとゴルフをしに頻繁に北海道に来ていた頃があった。その友人たちは会社経営をする金回りの良い連中で、彼らと札幌の高級料理店に行き、ハッカクをその時に食べた。刺身を頼んだので生きた姿もその時に見て知った。ハッカクは深海魚で大きなヒレを付けており見た目はグロテスクで、八角形のような形からそう呼ばれている。北海道でも小樽近海でしか獲れない希少な魚で、脂がのっていて濃厚な旨味がぎゅっと詰まった白身魚だ。深海魚なので一年中食べることができるが、漁獲量が少ないので地元でもなかなかお目にかかれない。本州ではまず食べることはできない魚だ。

それが失礼ながらこんなところで現れたから驚きだ。ここ豊富で、いや道北でも獲れるのか。開きの味噌焼きで出てきたから保存食かもしれない。私の常識はまたしても覆されたようだ。道北にはまだまだ知らないことが多そうだ。

全ての料理は豪勢で、ハッカク以外に甘エビやサーモンの刺身、ホタテとエビとイカと野菜の陶板焼き、海鮮の珍味、ローストビーフ、イクラご飯などご馳走が並んでいる。

さらにここ豊富はあの北海道とよとみしぼりのおひぎ元なので、その牛乳をプリンにした牛乳プリンも出てきた。牛乳そのものの味を活かしつつ、さらに少し甘みを加えて絶妙な味に仕上がっている。



【ホテル豊富の夕食】



【ハッカクの開きの味噌焼き】

第四章 オロロンライン

■オロロンライン

朝はゆっくりと宿を出発する。昨日のチェックインは2時半で、本日のチェックアウトは何と10時なので滞在時間は20時間近い。こんなにゆっくりとした旅は普通のツアーで考えられない。

本日はオロロンラインと呼ばれる道を南下する。オロロンラインとは、この地方に生息するオロロンチョウ、別名ウミガラスとも呼ばれる鳥にちなんでつけられた道の名前だ。

利尻富士で有名な利尻島から南にほぼ 80km の日本海の洋上に天売島、焼尻島という島がある。その天売島にオロロンチョウという鳥がいる。オロロンチョウは絶滅危惧種で、1938 年に国の天然記念物に指定を受けた。その時は 4 万羽もいたが、どんどん減って 2003 年に 19 羽になって、現在はさらに減っているようで今や待ったなしの状況になっている。



【オロロンチョウ 羽幌町 HP より】

このオロロンチョウにちなんで稚内から小樽付近までの日本海沿岸の国道をオロロンラインと呼んでいる。そして今、私たちを乗せたバスはそのオロロンラインを南に向かって走っている。

外は雪が降って風も強く吹いている。そんな中、バスは白い台地と海の間をずっと走っている。車窓から見る風景は時おり民家や牧場が登場するものの大きな変化はない。どちらかと言えば退屈な道かもしれない。でも私は、あるいは乗客の多くは、その退屈な風景を楽しんでいるように感じる。殺風景だが、決して見ていて飽きない風景が私たちを歓迎してくれている。

それでも乗客が退屈しないようにバスガイドはいろいろな話をしてくれる。

遠別町に入ると「この辺りが日本の稲作の北限ですよ」とか、窓の外を指さして「エゾシカがたくさんいます、雪の下の枯草を食べています」と教えてくれる。

北海道、それも道北地方は自然の宝庫で動物も多い。エゾシカ、キタキツネ、オジロワシ、オオワシ、そしてカラス、渡り鳥もいる。

それにしてもバスガイドはいろいろなことを良く知っている。いや、良く勉強していると言った方が良いでしょう。

そんな時、添乗員は本日の稚内発の飛行機は吹雪で欠航になったと、明日の便にそのお客が乗るので混むかもしれないと言っている。



【エゾシカ】

■天塩温泉はアンモニア臭

バスは天塩町に入ってきた。天塩町はシジミ、それも高級シジミで有名な町だとバスガイドが教えてくれる。

その天塩の「てしお温泉夕映」という施設にやって来た。私たちは立ち寄り湯での訪問だが、この施設は宿泊もできる。コロナでお客が少ないためか、それとも阪急交通社のクリスタルハートに一目置いているのだろうか、支配人が挨拶に立った。

「当館の温泉はアンモニア臭の黒い湯で実に珍しいものです。といっても前に入った人が何かしていたということはないですから、安心して入ってください」と言って笑いをとっている。

私たちはバスの中で、添乗員から天塩温泉はアンモニア臭がする珍しい温泉だと聞いていたので支配人の言葉にはあまり驚かないが、それでも実際に湯に浸かってそのアンモニア臭を嗅ぐと驚きは隠せない。

「こんな温泉があったのか！」私は思わず湯船で叫んでしまった。

この温泉はアンモニア臭だけでなく色も凄い。黒い湯、それも真っ黒なイカ墨のような色をしているので、臭さと黒さが私の叫びに繋がった。

■初山別はフグの村

立ち寄り湯と昼食のために初山別村の「ホテル岬の湯」にやって来た。一般客が食べるレストランではなく特別に食事会場が用意されている。やはりクリスタルハートの威力か。

初山別村は真フグの産地で有名だ。そして真フグは天然ものトラフグは養殖ものがほとんどだと事前にバスガイドが教えてくれた。

それゆえ昼食では天然ものの真フグの照り焼き重と真フグの湯引きが出てきた。素材がいいのか、どちらも美味しい。

フグと言えばトラフグで山口県というイメージしかなかったが、これも今回の旅で私の勉強不足が露呈したところだ。



【真フグの照り焼き重 真フグの湯引き】

温泉の方は黄茶色の塩化物泉でサウナ、露天風呂、ジャグジーなどあって露天風呂からは日本海も見ることができる。とは言っても雪のために視界は悪く、天売島も焼尻島も見えない。

今回のツアーはその名称にあるように7つの湯をめぐるというもので、いろいろな温泉に浸かってきた。今まで浸かってきた温泉はかなり特徴的な温泉もあったが、温泉成分表の泉質という面では全体的には似ており、ナトリウム-塩化物塩泉や炭酸水素塩泉が多い。

これらの温泉を総じて温泉観光アドバイザーの添乗員は「しょっぱい、黒っぽい」と言っている。温泉ソムリエの私は、「濃い」という言葉を付け加えたい。高張性の湯が多いからだ。

日本の温泉は温泉法という法律で定義されている。湧出温度が 25℃以上、または規定の温泉成分が温泉 1kg 中で 1g 以上含まれていないといけない。この成分の量が温泉の濃さになる。

人体の細胞液の濃度は 1kg 中に換算すると 8.8g になり、この 8.8kg よりも温泉成分の多い温泉を高張性、少ないと低張性、同じくらいのを等張性と呼んでいる。細胞膜は半透膜というもので出来ており、半透膜には濃度を同じにしようとする性質がある。従って高張性の湯は温泉成分を体内に取り込むように作用し、逆に低張性の湯は水分が体内に取り込まれる。

そのため濃度の高い高張性の湯に浸かると、この温泉は“効く”とを感じる。

■羽幌に泊まる

今宵の宿は羽幌町の「はぼろ温泉サンセットプラザ」で、建物も部屋もなかなか良い。

大浴場は日帰り入浴施設と兼用になっており、露天風呂、サウナ、寝湯、ジャグジーなどひとつおりの設備が揃っている。ここの泉質も「しょっぱい、黒っぽい、濃い」という表現がピッタリの温泉になっている。

本日は日曜日なので地元の人々が多く利用しており、サウナの会話を聞いていたらどうも漁師たちの会話らしく海が荒れていて船が出せなかったなどと話をしている。

ここも夕食が素晴らしい。北海道産牛肉のチーズと茸の包み焼きを筆頭に、刺身はカンパチ、ホタテ、サーモン、甘エビ、その他珍味などがあり、吸い物にも甘エビが登場している。

甘エビについてバスガイドからの事前情報がある。甘エビの正式名称は北国赤海老（ホッコクアカエビ）、いかにも北海道の海の幸という名前で、北海道の甘エビ捕獲量は全国の 7 割、ここ羽幌町では「はぼろ甘エビ祭り」が毎年開催されている。そのため羽幌の料理店では新鮮な甘エビがたくさん出てくる。

甘エビ以外にも一目置く料理があり、銀ダラの炊き込みご飯が卓上の固形燃料コンロで焚く釜めしで出てきた。妻はこんな美味しい炊き込みご飯は初めてだと感激していた。確かに高級魚の銀ダラを炊き込みご飯にするのは、あまり聞いたことがない。



【サンセットプラザ羽幌の夕食 これ以外に南蛮漬け、ジャガイモ饅頭、煮物など】

部屋からの景色はいかにも北海道の港町という感じがする。背の高い頑丈そうな民家が多く、その先に海が見える。ちょっと日本離れしている景色になっている。

その景色は夜になると昼よりも増して外国を感じられる。街路灯の灯りと吹雪のコラボレーションが、より一層いい感じの雰囲気を演出してくれる。

朝起きると風は吹いてはいるが雪は止んでおり、宿の部屋からは天売島、焼尻島が見える。平らな小さな島で、近くに見えるのですぐにも渡れるように感じられる。宿の近くの港からこれらの島に渡る船が出ており、羽幌は天売島・焼尻島へのアクセスポイントになっている。それにしてもこんなに近いのかと驚いてしまう。



【サンセットプラザ羽幌から見る焼尻島と天売島】

第五章 空港へ

■最終日の朝

朝起きて、私はいつものように大浴場に行く。すると先客が1人して、それが偶然にも添乗員だった。

「おはようございます。いよいよ今日が最終日ですね」どちらからともなく挨拶を交わすが、どうもごちない。裸の付き合いとはいうものの、スッポンポンではどうもバツが悪いのかもしれない。

そんな雰囲気を感じてか、私は「このツアーの添乗員は楽でいいですね」という言葉を口に出さずに添乗員と別れた。

本日はオロロンラインを北上し立ち寄り湯をしてから昼には稚内空港に着くことになっている。そのためにこのツアーにしては珍しく早い時間の出発だが、それでも朝8時30分だから全く問題ない。そしてバスはそれよりも少し早く宿を出発した。

■旭温泉

最後の立ち寄り湯のために遠別町の山の中にある「旭温泉」にバスは着いた。ここは宿泊もできる秘湯の一軒宿で、添乗員の事前情報では黒い湯と赤い湯の2つの源泉があって、内湯の他に露天風呂もあるという。

早速温泉に入る。内湯には黒い湯も赤い湯もあって内湯だけで両方が楽しめるようになっている。そして露天風呂は赤い湯になっている。

私はまず黒い湯に浸かってみる。確かに真っ黒で、この濃さは珍しい。まるで墨汁の中に入っているような気分になる。温度はやや熱いかもしれない。湧出温度は黒も赤もどちらも10℃くらいなので沸かしており、冬だから温度を高め設定しているのだろう。

次に赤い湯に浸かってみる。赤というよりも茶褐色、黄土色と言ってもいい色合いで、あまり透き通っていない。つまり温泉濃度が濃いのかかもしれない。入口に貼ってあった成分表では、赤い湯は高張性と書かれている。高張性とは温泉の濃度が濃く、反対に黒い湯は低張性と書かれているので濃度が低い。

露天風呂の赤い湯は、寒い外気に対してちょうど良い湯加減になっている。高張性の泉質と相まって露天風呂の有難味や醍醐味を感じられて実に心地よい湯に仕上がっている。

この地域の温泉は露天風呂にはあまり力をいれていないようで、あったとしても冬季は閉鎖している所も多い。極寒の地なので凍結による転倒事故防止や、湧出温度が低いのでボイラーで沸かす油代も馬鹿にならないからだろう。



【旭温泉 手前が黒い湯、奥が赤い湯】

露天風呂よりもサウナの方が充実していると感じる。それはサウナ発祥の地がフィンランドということで、寒い地域で人気があるからだろう。

ここ旭温泉にもサウナがあって、小さいながらも窓付きのサウナで外の雪景色を見ながらサウナを楽しめるということで実に気持ち良い。水風呂は家庭用のプラスチック浴槽を使っているのも面白い。

帰り道で私たちのバスとすれ違ったのは宿の送迎バスだ。地元の多くの人はいマイカーで来るだろうに、送迎バスとは驚きだ。山奥の一軒宿は2つの源泉、そして露天風呂とサウナという武器で攻勢に出ているようだ。

■自然には勝てない

11時頃、旭温泉から国道232号線を出るところでバスは道端に停まった。そして添乗員がいきなりマイクを握り、話を始めた。

「今入った情報で、残念なお知らせがあります。私たちが稚内から乗る予定の帰りの飛行機が強風のために欠航になりました。このまま稚内空港に向かうか、どうするか検討するので少し時間を下さい」と淡々とやっている。

乗客たちは一瞬言葉を失いそして少し経ってから「そんなに風は強くないのにね」、「稚内でもう1泊か」、「明日は用事があるから何とか帰りたい」、「自然には勝てないな」、「これが北海道、それも最果ての試練だね」などいろいろな声が聞こえる。私も稚内でもう1泊するのだろうと思い、それもいいかなどと考え始めていた。

バスを道端に停車したままにして、添乗員とバスガイドと運転手とが話し合っており、やがて添乗員が再びマイクを握ってこう切り出した。

「稚内から羽田は1日1便なので、稚内空港へ行っても東京には戻れません。旭川空港に行けば羽田便も飛んでいるので、旭川空港に行こうと思います」とやや明るい声になっている。

バスは動き始めて、しばらく走って道の駅に着く。

そしてまた添乗員が「ここで30分くらい時間をください。旭川空港からの便の予約や昼食を手配しますから」と言い、そして添乗員は忙しく電話をし始めている。

30分が過ぎて添乗員は「何とか旭川からの便が取れました。19時40分発で羽田着は21時25分です」と先ほどよりも明るい声になっている。

すると、ある乗客が「その時間に羽田についても家に帰れないよ、明日用事があるので帰らないといけない」と言っている。それもかなり強い口調で言っている。

添乗員は少し驚いたようだが、いやな顔もせず「もうしばらく時間をください。新千歳からならば便が多いのでそれも当たってみます」と言い、さらに忙しく電話をかけまくっている。

そして30分が過ぎて添乗員は「新千歳発18時30分の便があって、それに何とか乗れそうで、これだと20時10分に羽田に着きます。ただ新千歳までバスで3時間以上かかるのでバス会社などとも調整します」とやや興奮気味に言い放った。

そしてまた30分後全て終わったようで、添乗員から何とかあったという報告があってバスは新千歳空港目指すことになるが、バスガイドは明日の仕事のためにここで降りることになり、運転手は新千歳空港近くに泊まることになった。

私は添乗員の奮闘ぶりを近くで見ている、2つの意味で安心して胸をなで下ろした。ひとつは彼の冷静で的確な危機対応で、これによって私たち全員が早く帰宅できるようになった。そしてもうひとつは今朝の大浴場で私は彼に「このツアーの添乗員は楽でいいですね」などと口にできなかったことだ。

終章 旅を終えて

■何とも言えないこの旅の魅力

羽田空港で出発の前、添乗員が「〇〇さん、また来てくれたのですか」と驚いていた。それは今回と全く同じ内容のこのツアーを1月に実施した時に参加したお客が今回も参加しているということだった。そのお客はこのツアーが余程気に入ったのか、2カ月後に再び参加するというのは添乗員にしても予期せぬことだったに違いない。

それにしても2カ月後にリピートすることを、その時の私はとても理解できなかった。

この旅に出る前の私は、冬の寒い中に温泉に入りに行くだけという軽い気持ちで、正直あまり期待していなかった。しかしこの旅を終えてもっと深い違う感慨に包まれている。今まで体験したことがない何とも言えない旅の魅力を感じている。そして今は2カ月後にリピートしたお客の気持ちも理解できるようになっている。

その魅力の要因は、珍しい泉質の湯や各地の特産品の料理、どちらも私が予期していなかったので感動に繋がった。感動とは予期せぬ場合や期待していた以上のものを体験すると大きく感動するというのが私の持論で、今回は私の経験不足、勉強不足によるものだ。

さらにクリスタルハートというブランドの恩恵もあり、ワンランク上の宿や食事もその要因だろう。宿はその土地で一番良い宿を選んでおり、各地で食べた昼食も通常の定食ではなく、メニューにない特別注文の料理ばかりだった。

それら以外に要因があるとすれば、それは“ゆとり”ではなからうか。

それはまずは時間的ゆとりだ。今回訪れた観光名所は2つの岬くらいで、ほとんどは温泉に入るだけでスケジュールにゆとりがある。そのため宿に午後2時半に入ることもあれば、朝10時出発することもあった。

そして次は空間的ゆとりだ。バスは1人2座席占有でゆとりがある。車窓からの風景も北海道という大地、そして雪だけの平原も極めて広々と感じられる。岬でも、温泉でも、昼食でも、宿でもお客はほとんどおらず、私たちはほぼ貸し切り状態だった。これもコロナの影響かもしれないが、コロナがなくても冬の道北はやはり観光客は少ない。

これらの“ゆとり”によって旅がより上質になって、何とも言えない魅力につながったのに違いない。

■残念な入浴マナー

今回のツアーは7湯めぐり、それに加えて私たち夫婦は豊富町のふれあいセンターでも入浴したので8湯めぐりになったが、どこの温泉に入っても入浴マナーがどうも気になった。

それは特にこの道北地域だけではないとは思いますが、残念な思い出になった。掛け湯をしない、湯にタオルを入れるなど入浴の基本が守られていない。それはツアー客も地元客も、若者も年寄りも、一定の割合でそんな客がいるようだ。家庭風呂が普及して公衆浴場の入浴マナーを教える人や場所がないからなのだろうか。

付け加えるとサウナの利用マナーも同様に悪く、水風呂に入る前に汗を流さない、水風呂に潜るなどという人も多い。マナーではないが、サウナに入る前には体を拭いて入ることが重要で、体が濡れていると発汗作用の妨げになるからだ。これは案外知られていない。

温泉は日本が誇る立派な文化で、その温泉文化を愛してやまない私にとっては実に残念でならない。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っって各項目を5段階で評価し、委員会として評価値を算出する。

評価の基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

今回泊まった宿は3軒だが、それ以外の温泉宿ではない立ち寄り湯も評価してみた。

尚、コスパはパッケージツアーなので一括で払っているため評価しておらず、さらに立ち寄り湯のみの場合は料理も評価していない。

稚内温泉「稚内グランドホテル」は泉質 4、風呂 4、料理 5、コスパ-、サービス 3、建物・部屋 4、立地環境 3、総合点 3.83 になった。

湧出温度 35℃、pH6.86、泉質は高張性、含よう素-ナトリウム-塩化物強塩温泉

浜頓別温泉「はまとんべつ温泉ウイング」は泉質 5、風呂 3、料理-、コスパ-、サービス-、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 4.00 になった。

湧出温度 44℃、pH8.2、泉質は低張性、ナトリウム-塩化物・炭酸水素塩温泉

豊富温泉「豊富町ふれあいセンター」は泉質 5、風呂 4、料理-、コスパ-、サービス-、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 4.25 になった。

湧出温度 34.2℃、pH7.5、泉質は高張性、含よう素-ナトリウム-塩化物温泉

豊富温泉「ホテル豊富」は泉質 5、風呂 4、料理 5、コスパ-、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 4.33 になった。

湧出温度 27.7℃、pH8.0、泉質は高張性、ナトリウム-塩化物・炭酸水素塩温泉

天塩温泉「天塩町民保養センター」は泉質 5、風呂 4、料理-、コスパ-、サービス-、建物・部屋 4、立地環境 3、総合点 4.00 になった。

湧出温度 31.2℃、pH7.3、泉質は高張性、含よう素-ナトリウム-塩化物塩温泉

初山別温泉「ホテル岬の湯」は泉質 4、風呂 4、料理 4、コスパ-、サービス-、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 4.00 になった。

湧出温度 21.4℃、pH7.7、泉質は高張性、含よう素-ナトリウム-塩化物塩温泉

羽幌「はぼろ温泉サンセットプラザ」は泉質 4、風呂 4、料理 5、コスパ-、サービス 3、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 4.00 になった。

湧出温度 31.6℃、pH7.3、泉質は高張性、含よう素-ナトリウム-塩化物塩温泉

遠別「旭温泉」は泉質 5、風呂 5、料理-、コスパ-、サービス-、建物・部屋 3、立地環境 4、総合点 4.25 になった。

2つの源泉のうち黒色の富士見の湯の湧出温度 12.2℃、pH8.2、泉質は低張性、ナトリウム-塩化物塩・塩化物泉。もう一方の茶褐色の旭の湯の湧出温度 10.8℃、pH7.2、泉質は高張性、ナトリウム-塩化物泉

■旅の記録

実施は 2022 年 3 月 4 日（金）～7 日（月）の 3 泊 4 日、その行程を以下に示す。

- ・ 1 日目 自宅を 8 時に出発し 10 時 40 分羽田空港発のフライトで 12 時 35 分稚内空港到着
副港市場で昼食、ノシャップ岬、稚内港北防波堤ドーム、稚内駅を見物
16 時に「稚内グランドホテル」到着
- ・ 2 日目 9 時 30 分ホテルを出発、宗谷岬、クチャロ湖水鳥観察館、
「はまとんべつ温泉ウイング」で立ち寄り湯、猿払村の「ホテルさるふつ」で昼食
14 時 50 分豊富町の「ホテル豊富」チェックイン、
近くの「豊富町ふれあいセンター」で立ち寄り湯
- ・ 3 日目 10 時ホテル出発、天塩温泉「天塩町民保養センター」で立ち寄り湯、
初山別温泉「ホテル岬の湯」で立ち寄り湯と昼食、
羽幌の「はぼろ温泉サンセットプラザ」にチェックイン
- ・ 4 日目 8 時 30 分ホテル出発、遠別の「旭温泉」で立ち寄り湯
稚内空港は強風のため飛行機が飛ばないことが判明し、急遽新千歳空港に変更し
18 時 30 分発羽田行きで 20 時 10 分羽田空港到着し 21 時 30 分帰宅

総費用は約 22 万円で、1 人当りは 11 万円になった。

- ・ 旅行会社（阪急交通社）への払い込み 200000 円（2 人分）
- ・ その他 約 20000 円（2 人分）

羽田空港までの往復交通費、最終日の昼食代、飲み物代、土産物代（今回はこれが大きい）